

西伊豆健育会病院

症例概要 患者:80代 女性

病名:右下腿壊疽

入院期間:令和元年8月下旬 ~ 令和元年12月中旬

経過:令和元年8月下旬、右足痛を主訴に受診。右踵部壊疽・閉そく性動脈硬化症も認めることから右大腿切断。年齢や自宅の状況、独居のため今後の生活を考え、施設等を探すことをお勧めしたが、ご本人の強い希望から自宅退院を目指すこととなった。医師を中心に看護師、リハビリスタッフ、相談員、ケアマネ、業者、町の介護スタッフがワンチームとなり自宅退院を実現させた。現在もご本人はお元気に自宅で独居生活を楽しんでいる。

内容

80代女性。2019年8月下旬に右足痛を主訴に受診した。診察で右踵部に皮下膿瘍と強い悪臭を認めた。右踵部壊疽の診断で同日入院となった。局所麻酔下に膿瘍/壊死組織を切除したが、膿瘍は足底から下腿にまで達しており、内科的な小切開と抗生剤治療のみでは治癒が困難と判断、右下腿背側から足底にかけて広範囲な外科的な切開を追加した。

連日、切開部位の洗浄と膿瘍ドレナージを継続したが、長期的な治療が必要な事、背景に閉塞性動脈硬化症を認めることから、創部の感染のコントロールが困難になる可能性もあること、また創部閉鎖も今後困難が予想されることからご本人、ご家族、整形外科医師とも相談し第12病日(9月上旬)右下肢切断を実施した。特にご本人としては、1日でも早く自宅に戻りたいとの希望があり、当初右下肢切断の手術にはもちろん前向きではなかったが、話し合いを繰り返す中で、感染治癒、早期退院が可能となる手術に対して理解し決心がついた。

術後、右下肢の幻肢痛を認めたが、徐々に改善し感染症も治癒した。自宅生活は基本独居であり自宅退院には自宅内の移動の自立が必要であった。ただご本人も自宅退院の目標が明確であり、リハビリに積極的に取り組んだ結果、予想以上に前輪型歩行器の獲得が早く、自宅退院への可能性も見えてきた。自宅療養にむけ家屋調査・試験外出を経て第112病日(12月中旬)自宅退院となった。

今回、右下肢切断という大きな病気を患いながら、「独居の自宅に戻りたい」というご本人の希望を叶えるために、入院当初は内科、整形外科医師と治療方針について協議し、術後は自宅退院を目指し病棟看護師、リハビリスタッフ、相談員、ケアマネージャーと自宅生活に合わせた動作の獲得や自宅

改修、利用サービスの検討を行い自宅退院、自宅での療養継続を可能にした。積極的なご本人の意欲が最も大事ではあったが、私達が One Team となって取り組んだ結果だと思う。